

1 奥出雲町の歴史

本町の歴史や文化は、古事記、日本書紀の舞台という悠久の歴史をもち、多くの神話物語を残し、風土記時代には仁多の郡は三処郷、布勢郷、三沢郷、横田郷に属していました。

また、本地域は山陰と山陽を結ぶ要衝の地に位置していることから、中世・戦国期には尼子氏、毛利氏の戦いの狭間に置かれ、尼子氏滅亡後、毛利氏の支配下に置かれました。江戸期には松江藩に属し、宝暦年間（1751年～1764年）の「雲陽大数録」によると当町域には57か村があり、三成には仁多郡家が置かれていました。

中世において、幾多の攻防の舞台になったことにより、数多くの山城が築かれ、その面影は城址としてそれぞれの地域で保存されています。

特に、出雲国風土記には鉄の産出地として記されるなど、明治初めまで国内の一大鉄生産地として栄え、出雲地域における一大文化圏を成してきました。しかし、たたら製鉄は明治時代中期以降、洋式近代高炉の操業や安い洋鉄に押されて衰退を余儀なくされました。たたら製鉄の衰退とともに、小高炉の角型炉等が建設され、銑鉄の製造が昭和40年まで続けられました。

その後、日本刀の原料である玉鋼が枯渇したことから、昭和52年に財団法人日本美術刀剣保存協会によって再びたたら製鉄の炎があがりました。

砂鉄採取のための鉄穴流しにより形成された土地では、斐伊川源流の良質な水と昼夜の温度差の中で「仁多米」を育みました。また、有力なたたら経営者であった鉄師等により「仁多牛」の改良が行われたほか、製鉄用の燃料として豊富な山林資源を利用して木炭を生産しました。このように、たたら製鉄は本町の産業基盤の礎となりました。

さらに、たたら製鉄により生産された良質の鉄を原料として優れた刃物製造技術が生まれ、堅木を加工する技術が発達し、「雲州そろばん」や木工芸などの地域産業が生まれました。雲州そろばんは、最盛期には全国の約70%のシェアを誇っていました。卓上計算機の発達などにより生産量が減少していく中で、現在も工芸品などの伝統産業として脈々と受け継がれています。

そして今、本町に息づいてきた歴史や文化を活かした魅力あるまちづくりが進められるとともに、地域の特徴ある産業や生活文化、豊かな自然や美しい景観をそのまま観光・交流のための資源とする新たな取り組みが展開されつつあります。このように古代から神話や歴史、文化、産業など様々な面で密接な関係を築きながら地域づくりが進められています。

(1) 布勢地区

松江に通じる要衝で、仁多郡の玄関口として古来より旅人や産物駄送の往来が多くあった地域であるとともに、スサノオのヤマタノオロチ退治神話にまつわる伝承地を幾多も残しています。



狭隘ながら、整った街並みを残す布勢（現在）

出雲国風土記によれば、大穴持命（大国主命とも言う）が仁多郡におこ

しになった際に宿泊されたところであって、泊まり「臥せ（横になって寝るの意味）」られたという意味で「布施」となったと記載されています。また、旅宿や施食をもって往来人の困難を救う半官的布施屋が設けられたので、この地名が生まれたとも言われています。三所は、大穴持命（大国主命）が「この田んぼは大変よい田んぼである。だから自分の御地（みところ）とする」といわれて名付けたとされています。

鎌倉時代、北条時頼の後室で時輔の実母は、「三所比丘尼妙音」と名乗り、三所を拠点に横田庄の地頭となっています。このことから、当時の政治の中心地であり、また中央とのつながりの深さが伺い知れます。

戦国時代になるとスサノオが居を構えたと伝承を残す須我非山に三沢氏の出城とされる山城が築かれました。今日では、そのまま「城山」と呼ばれ、大人山や岩伏山などとともに親しみ仰ぎ見られています。

江戸時代、松江城下との主要往還であったため、仁多郡中の上納米や農産物が佐白に集められるなど、流通の拠点地域として発展を遂げました。明治になり、特に難所であった樋の谷峠が整備されたことにより、いよいよ人や馬の往来が多く、四輪馬車が米、木炭、繭等を積んで鉄輪の音を響かせ、流通中継地として、また宿場として三成をしのぐほどの繁栄ぶりでした。

また、八代の町並みは狭隘でありながら、整った町並みが形成されています。布勢村史によると明治時代までは田園風景であったものを、当時の地元の有力者の先見によって道路の付け替えなどが行われ、大正時代に今の八代集落の町並みができあがったといえます。今で言う都市計画事業がなされたと言えます。

今日、尾原ダム建設に伴い一部の歴史景観は失われてしまいましたが、まともりのある集落が残っています。

(2) 三成地区

風土記時代には三成は三沢郷の一部であったことが知られています。鬼の舌震は、ワニとタマヒメノ命の伝承地として「恋山」と登場します。巨石・奇岩・甌穴からなるV字溪谷は今にその物語を伝え、国名勝及び天然記念物に指定されています。今日もなお、風土記で記された風情を味わいに訪れるものがあとを絶ちません。



三成愛宕祭りの様子（昭和初期）

地理的に見ると本町の中心に位置していますが、矢谷や高尾の一部を除き耕地に恵まれず、中世まであまり注目されていませんでした。

しかし、近世初頭の寛文四年（1664年）、良質な米生産地域であった奥出雲の租米の輸送向上のため、藩は川方（舟付場）を設置することを決定しました。善勝寺を川方御用寺として三所の石原から移し、本地域唯一の菩提寺として今日に至り、三成の市街を見下ろしています。

この川方の設置により、農作物等の輸送の集積地として急速に栄え、今日の市街地の礎を築きました。後に三成駅場と呼ばれ、郡内各地へ道が通じると、横田から郡屋などが移され、政治と交通の中心となっていきました。

明治になって文明開化の波が地方まで及んで、仁多郡役所や警察署などが、加えて製糸工場、製鉄工場が置かれ、いよいよ行政と経済の中心が三成になりました。さらに木次線の開通により、ますます発展し、宿屋、飲食店、商店が軒を並び、年末のブリ市には近郷はもとより高野町の人たちなど郡内最大の歳の市として大いに賑わいました。

ところが、戦争で疲弊し本土決戦が叫ばれる昭和20年4月に大火があり、三成の町並みはもとより、連担地であった矢谷、里田、石原、湯の原の一部も消失し、ほとんどすべての商店や家屋が罹災してしまいました。

しかしながら、温かい相互扶助に助けられ、人々は嘆き悲しむことなく復興への努力を重ね、今日では仁多地域の中心市街地として元より増して素晴らしい町並みが形成されています。300年余り継承されている愛宕祭りも変わることなく賑わいを見せ、一夜城が在りし日の思いを馳せてくれます。

また、高台に奥出雲病院、島根リハビリテーション学院、中学校、ホッケー競技場をはじめ総合運動場を配し、福祉・文教ゾーンの整備も進んでいます。

(3) 亀嵩地区

郡は仁多郡の中心として郡家が置かれたことで知られ、大領原、内裏原などの字名を残しています。ここ周辺には古代豪族の墓である常楽寺古墳は人物埴輪を出土し、郡内最大の岩屋古墳、円面硯や墨書土器などが発見されたカネツキ免遺跡が往時の姿を明らかにしています。また、高田寺は天平時代にさかのぼるといわれ、その跡を残しています。



郡に広がる田園（現在）

出雲国風土記に載る玉峯（峰）山の西の谷奥に三沢氏により亀嵩城が築かれました。亀嵩の町並みは同城下としてはじまり、三郡山を越えて、能義、大原、松江方面へ出る通路や伯太、安来に通じる要路であったため、のちに交易と宿場として発展したものと考えられています。城麓には、三沢為清の菩提寺である覚融寺があり、裏手にある池泉は同氏の手によるものとされ、茶人利休の一番弟子であった山上宗二との交流も知られています。

現在も残る亀嵩の中心部の古い町並みは旧街道筋の両側に展開しています。街道西側に十満寺、聞善寺、覚念寺が軒をつらねて建立されている様は、まるで小京都を思わせ、一種独特の町並みをつくりあげています。また、総光寺は16の末寺を数えるほど近郊では稀なお寺で、開祖の不見明見禅師の袈裟は寺宝として今も大切にされ、雨乞いの伝説を残しています。

松江藩9鉄師の一人であった伊豆屋の本拠で、鍋坂山、五万城山、三郡山が連なる北峰の山麓に位置する琴枕、上分、中湯野、久比須にかけては大規模な鉄穴流しがおこなわれたことが見て取れ、今日水田となり人々の生業となっています。

亀嵩を中心として栄えたそろばん工芸は、天保年間、大工の村上吉五郎によってもたらされました。彼の卓越した技術と工夫により作成されたそろばんは名品との評判を得ました。その後、明治に入り、一部の機械化により、量産が可能となり、優れたそろばんを製造し、「亀嵩そろばん」の名声を全国で高め、今も亀嵩そろばんがはじかれ続けています。

今日では、温泉施設の玉峰山荘や道の駅酒蔵が整備され、観光と癒しの拠点ともなっています。

(4) 阿井地区

阿井の中心部を阿井川が北流し、南西部に鯛ノ巣山、これに対峙するように南の備後国境には猿政山がそびえています。猿政山は、風土記の「御坂山」に比定され「此の山に神の御門あり」と記しています。そして、神代に因む地名と伝説を多く残し、イザナミノミコトが葬られた地と伝え、また山麓には「伊装冊(いざなみ)」という地名が今に残っています。



押輿神事の様子(昭和初期)

阿井川を並行して走る国道432号線は古来よりの主要往還で、風土記時代には政ごとがおこった場合に柵をまわした割(関)が王貫峠に置かれました。この峠を、鎌倉幕府の討幕を企て承久の乱に敗れた後鳥羽上皇が隠岐に流される時に越えたともいわれています。また、日本地図を作った伊能忠敬もこの往還を通り安芸国から日本海に抜けています。

近世初頭、安芸国可部から王貫峠を越えて谷深く抱かれた狭隘な谷間の内容に居を構えた櫻井家は、製鉄業をなし、奥出雲御三家と呼ばれる格式をもつに至りました。菊一印は櫻井の鉄を指し、この良鉄の名声は遠く国友鉄砲鍛冶にも使われるなど、奥出雲の鉄の優秀性が知られています。

広大な敷地に主屋をはじめ付属屋、土蔵が立ち並ぶ鉄師頭取の屋敷構えは威風をはなち、国重要文化財に指定されています。また、眼前を流れる内容川沿いには京もみじが植えられ、周囲と調和した景観は訪れる者の心を和ませ癒してくれます。

鯛ノ巣山麓に位置する福原集落は、吉田に通ずる山道沿いに台地が開けています。良質な砂鉄を産する地域として早くから着目され、鉄穴流しの跡を水田化して集落形成がなされています。そして、半谷を降りると近世初頭に成立した上阿井の中心部を構成する町並みが残っています。櫻井家のたたら製鉄の隆盛とともに形成され、交易と宿場町として成長しました。下阿井は、河岸段丘沿いに水田が開け、谷間沿いは盛んに流された鉄穴跡の面影が見て取れます。

古式に則り豊作の吉兆を占う阿位八幡宮の押輿神事や山上神事など伝統文化を守り続けています。

(5) 三沢地区

三沢の下鴨倉では、縄文時代早期後半から晩期にかけての長きにわたって続いたことを示す下鴨倉遺跡が知られ、古墳時代の墳墓や横穴墓も数多く所在し、古くからの人々の営みがあったことが解っています。



要害山から見下ろす景色（現在）

この地の由来について、出雲風土記に病弱であった阿遲須枳高日子命が「三澤（津）」と発したことにより、「三澤」となったとしています。ここには清水が湧き出る泉水があり、出雲国造は新任の際に、この泉の水で禊を行ったのち、上京して奏上をおこなったとされ、三沢城の三沢池または原田の三津池がその比定地になっています。また、官社として三澤社が仁多郡で最も高い格式をもっていました。そして、風土記に最も詳細に記されているのが三澤郷で、秘めた力をもった土地柄だったことが伺いしれます。

承久の乱の功により、三沢の郷を得た飯島氏は14世紀初頃にこの地に下向し、鴨倉山に居城を構えました。そして、この地の地名である「三沢」を名乗りました。やがて雲国内随一の国人（土着の武将）に成長していき、その後300年余り奥出雲の雄として存在し続けました。地元では「要害山」と呼ばれ、三沢のシンボルとして住民に親しまれています。

今に見る三沢集落は、古刹の蔭涼寺が通りを見下ろし、三沢神社が背に構えて、対面に三沢小学校を配し、まとまりのある集落形成をしています。一見城下町にも見えますが、もともと城下として市がおこなわれた場所は別に「四日市」と地名を残しています。このことから、江戸時代に宿場として町並みが移り成長したものとも考えられています。

大吉集落周辺地は鉄穴水田が広がり、近世末にかけて増し鉦として許可された大吉鉦が櫻井家と田部家の共同吹きとして操業されました。現在も山内跡が残り、製鉄地帯であったことがわかります。

要害山の北麓は、良質の赤目砂鉄産する雑賀鉄穴が知られ、竹崎の羽内谷鉄穴流し場とともに最後まで流された地域でもあります。

途切れることのないトウトウの名瀑の音が、三沢郷の季節の移り変わりと、悠久の時の流れを感じさせてくれます。

(6) 鳥上地区

斐伊川源流の頂き船通山は、本町を代表する名峰で、スサノオのヤマタノオロチ退治の舞台として周知され、本地区は、この山麓に抱かれた谷間ごとに散村集落を形成しています。



船通山を見上げる風景（昭和初期）

古代から出雲・伯耆の国境をなしており、「日本書紀」には「簸の川上に所在る、鳥上の峯」、「古事記」には「肥上の河上、名は鳥髪といふ地」、「出雲国風土記」の仁多郡には「鳥上山」とあります。「出雲国風土記」には塩味葛（薬草の紫葛）があると記されているが、現在の植生は三長に天狗の土俵と称される多年生草木の芝類が茂り、初夏はカタクリの花が咲きます。

龍の駒遺跡によって縄文時代からの人々の営みが見え、鳥上小学校の周辺の河岸段丘地には弥生時代の大規模な集落跡があったことが知られ、「小国」の地名を残しています。また、対岸に佇む鬼神神社は風土記に載る「伊我多気社」であったとされ、横田の郷の正倉も大呂周辺に所在したとする説もあります。

近世に入ると、追谷を本拠とする鉄師ト蔵家が本地域を中心に亀石鉦や龍の駒鉦を稼業し、それに伴う鉄山経営、鉄穴流しが盛んにおこなわれました。特に、主力鉦であった「原鉦」が稼業した追谷集落は、「ト蔵」を冠する“ト蔵橋”が架かり、ト蔵家を中心とした独特な集落形成がなされていきました。また、大呂の福頼・山県は近世半ば以来、砂鉄採取のための鉄穴流しによる跡地の開畑と田成の水田が拓かれ、全国で最後まで稼働した「羽内谷鉄穴流し場」が、盛んに流された往時の面影を残しています。

安い洋鉄におされ、衰退を余儀なくされたたたら製鉄にかわって、角型熔鉦炉による量産の試みが各地に起こり、特殊鋼を生産していた安来製鋼所が大正7年に鳥上木炭銑工場を設置、本格稼働しました。続いて昭和8年には、「日刀保鉦」の前身である「靖国鉦」が再び炎をあげ、荒木陸軍大將をはじめとする要人の視察が相次ぎ、脚光を浴びました。靖国鉦は、終戦とともに休止しましたが、国登録有形文化財の木炭銑工場は昭和40年まで操業されました。

その後、靖国鉦は昭和52年に「日刀保たたら」として復活し、美術刀剣の原材料の和鋼の生産を始め、今日にいたるまで、絶やすことなく“たたら炎”をあげ、たたら製鉄の聖地となっています。

(7) 横田地区

出雲国風土記によると、横田と名付けられた由来は、この地には田んぼが段々に四つばかりあって、その形が横に大変に長いものであったので「横田」と名付けられたと伝えています。また、正倉があったことが記され、豊かな大地であったことがうかがい知れます。



横田多里線改良前の様子（昭和50年代）

風化花崗岩地帯にみる中国山地脊

梁の山麓、斐伊川両岸に広がる横田の盆地は、中世には横田庄として岩屋寺、横田八幡宮が所在する中村を中心に栄え、今に幾多の歴史を残しています。

戦国期に北西の高罌山に三沢氏によって藤ヶ瀬城が築かれると、城山の足下と斐伊川を挟んだ南の河原に中村市場が移転され、六日市場・大市場として急速に発展していきました。江戸時代には六日市には代官屋敷などがあり、町の政治の中心部でした。また、銘酒で名高い簸上清酒は正徳2年（1712年）にその産声をあげ、醸す麴は300年の歳月を経てさらに深みを増し、「簸上正宗」に代表する清酒は幾多の賞を受賞しています。

六日市と大市の間には、吉重橋がかかっています。文政年間（1818～30）の初め頃、安部吉重郎がこの場所に橋を掛けたことがその名の由来となっています。その橋を渡るとJR木次線の路線まで南へまっすぐ大市本通りが続いています。この町並みで異彩を放つのが尖塔を持つ横田相愛教会であり、これは大正12年の建築で、当時山間部では非常に珍しい洋館建築でした。今日では、通りのランドマークとなり、国登録有形文化財に登録されています。

横田の玄関口である横田駅舎は、歴史ある横田にふさわしいものにしたいとの町民の願いにより社殿造りとし、駅前に10間（約18m）の堂々たる道路を準備しました。平成の横田多里線の街路事業も家並み景観を揃えるなど、その心が受け継がれています。

稲田地区に広がる田園は江戸時代天保年間に福田勘兵衛が藩に許しを得て開田したものとされ、地形的にみると鉄穴流しによる水田形成が見て取れます。深山を背にしていなかったため、水量に恵まれず、用水は幾多も点在する溜め池に依存し、今日も活用されています。また、蔵屋集落も大規模な鉄穴流しがおこなわれ、水田が広がっています。

(8) 八川地区

三国山を源流とする室原川（下横田川）が南北に流れ下り、並行して国道314号線おろちループ橋が、平家一夜城伝説を残す平家平に架かり、南の玄関口として本町へ導いています。

この往還は伯耆国、備後国に通じる山陽と出雲を結ぶ主要道で、中世には横田庄の代官として安部氏や石原氏などが降ってきた街道といわれています。

中世初頭、寄進系荘園であった横田庄には、源頼朝が国家安泰を祈願し、横田別宮として、当時中心地であった八川の尾園村（宮谷）に八幡宮（元宮八幡宮）を建立しました。荘園地での「横田」とは当初、八川八幡宮を指し、それ故に下（しも）に所在した集落地域を「下横田」と呼び、今日に至ります。

守護山名満幸は横田庄を横領し代官に降らせた石原氏は、三笠山の下横田城に居館を構えたとされています。このことに端を発し、明徳2年（1391）に明徳の乱がおこり、歴史の舞台となりました。この頃、八川小学校周辺地に市場があつて、栄えていたといわれています。本町で最も古い市場であつたので、後に「古市」と名付けられたといわれています。

現在でも古市は往還沿いに家並みが続き、小規模な町を形成しています。昔ながらの旅館や昭和13年に建築された洋風建築の八川郵便局旧局舎は国登録有形文化財に登録されるなど、この古い町並みは中世の名残を留めています。

大谷地区は大規模な鉄穴流しがおこなわれた地域で、すり鉢状に水田形成がなされています。その立地に着目した鉄師絲原家は天明8年に叶谷鉦を雨川の鉄穴鉦に移しました。これに伴い本拠も移し、住居一体型の山内集落が形成され、黒門が構える絲原家住宅は鉄師頭取の佇まいを今に伝えています。また、絲原記念館では隆盛を極めたたたら製鉄の歴史を知ることができます。

三井野原は、食糧増産のため農業報国会島根支部の直営農場が昭和19年に設置され、島根県農兵隊200名によって開墾を開始しました。敗戦とともに開拓農場となり、入植者を募り、徐々に応募者を得て人々の懸命な努力によって今日を迎えています。

昭和28年に広島県より島根県に編入され、高原野菜の先進地として、またファミリースキー場として賑わいを見せています。



三井野原 38豪雪の様子（昭和38年）

(9) 馬木地区

本地区は、風土記時代には阿井郷に属し、大馬木川、小馬木川とその支流域に立地しています。

南の備後国境には風土記の遊託山に比定されている烏帽子山、古事記に見える比婆山に葬られたイザナミを訪ね降りたイザナギが「嗚呼、吾が妻よ」と叫んだとする吾妻山がそびえています。



田おこしをする様子

また、北嶺には日尊上人が経を納めたと伝える仏山を配し、中央に八笈山から南北に派生する尾根が大馬木と小馬木を分かち、この頂には馬來氏が夕景城を構え、馬木全域を見渡しましたこれら、由緒ある山々が裾野を広げ、その谷間に集落が形成されています。

14世紀になると山名氏の一門で摂津国馬來郷を領していた馬來氏綱が横田庄の西隣である馬木郷に着目して移り来て、既述の夕景城を築き、のちに冬の居城といわれる小林城を構えて領しました。

さて、本地区には現在4ヶ寺所在し、そのすべてが日蓮宗であり、日蓮宗開祖日蓮の孫弟子日尊上人開祖の京都の本山要法寺に属しています。日尊上人は諸国行脚の途中、36の寺院を建立したとされ、その最初が古刹の安養寺といわれています。3世住職の日源は本山要法寺の6世貫主となった高僧として知られ、他に3名貫主を輩出しています。また、得意な囲碁で破れて庭に投げ捨てられた碁盤から萌芽したとの伝説を持つ「金言寺の大イチョウ」も、改宗の経緯を今に伝え、田園風景と調和する茅葺屋根に色づく大イチョウを愛でに訪れる者はあとを絶ちません。

そして、日源の信仰と学徳により入信した馬來氏は残る郷内すべての寺院を日蓮宗に改宗させました。その伝統は今なお続いており、地区内各地に点在する路傍の石仏が日蓮の郷を物語っています。

戦国の世が終わると、絲原家は備後国を越え大原の湯の廻に移り住み製鉄業をはじめました。先んじて鉦を吹いていた杠氏が隆盛を極めていたことも所以と思われ、各所に鉦跡を残しています。

高野に通じる俵原越の折渡も盛んに鉄穴で流された面影を残し、吾妻山北麓は良質な砂鉄が産する地質で、渋谷や棚田百選に選ばれている大原新田を拓き、豊かな大地で育まれる良質な馬木米は周知のとおりです。